

戦前の沖縄における「エイサー」と 「盆踊り」の諸相

遠藤美奈

Various Aspects of "Eisa" and "Bon Odori" in Okinawa before World War II

Mina ENDO

はじめに

本研究は沖縄がおかれてきた地理的・歴史的な立場のなかで、育まれることとなった複雑なアイデンティティや文化事象について、民俗芸能の実践に焦点をあてながら、どのような意識と実践をもって、こんにちまで継承してきたのかを明らかにする試みのひとつである。本研究ノートのなかで注目した芸能は、「盆」の芸能である。

沖縄は、かつて琉球とよばれ、王朝を形成し、東アジアの諸国との貿易を通じて多様な文化を取り入れて発展してきた。この点は沖縄の文化の特色の1つとなっている。なかでも、琉球の歴史のなかで冊封関係にあった中国からは、多くの芸能が定着または影響を受けているが、中国との密接な関係にあるなかで、中元の行事は日本から入ってきた仏教の影響を強く受けたとみることができる。沖縄における盆の芸能は、古琉球時代まで遡ることができ、中元に芸能が行われていたことがわかっている。のちに中国からの使者である冊封使を歓待するための役職として名高い「踊奉行」は、もとは王や王族の年忌のために芸能を奉納する役職であった。沖縄の中で盆行事が定着する過程には、京太郎（チョンダラー）と呼ばれる本土からやってきたとみられる念仏者の芸能が広く伝播したと考えられていて、ムラの青年たちが浄土宗系の念仏歌に合わせて各家を踊りめぐる盆の行事として定着した。地域によって「念佛まわり」「ヨ

イサー」「エイサー」「エンサー」「七月舞いしちがちもーい」などと呼ばれている。

沖縄では、盆の時期になると各地で念仏等を含む多様な芸能が演じられる。沖縄本島ではエイサー、八重山諸島ではアングアマやスルブディなどがそれである。このように、それぞれ地域に根ざした盆の芸能が極めて知られている一方で、実は盆やその時期の前後に公民館や学校の運動場で「盆踊り大会」や「納涼祭」が催されている場合が多い。さらに、地域によっては、「伝統的な」盆行事の一部と結びついたり、3年マールのように3年に1回は「盆踊り大会」を催したりしていて、「盆踊り」が「伝統的な」盆の行事に組み込まれて行われている場合もある。さらに遡れば、1952年8月22日にはじまった旧石川市（現：うるま市）での最初とみられるエイサーコンクールの正式名称は「米琉親善盆踊り大会」であり、実際に第一部は盆踊りコンクール、第二部がエイサー競演であったことがわかっている。

本稿では、盆時期の芸能として定着した背景を探るとともに、沖縄の「伝統的な」盆行事へ静かな定着をみせてきた「盆踊り」の実践について、戦前の新聞等記録から整理し、戦前に「盆踊り」と呼ばれた芸能の様子を明らかにすることを試みた。

1. エイサーの同義語としての盆踊り

本稿をはじめに先だって、「盆踊り」とは、何かを定めておきたい。本稿における「盆踊り」とは、盂蘭盆会に端を発する踊念仏のことではなく、1932年以降、爆発的な人気を博した東京音頭以降の地方にみられる流行歌等による「盆踊り」のことを指す。例えば、櫓を用いてレコードや生演奏に合わせて太鼓が入り、その周りをそろいの浴衣で踊り、決まった振付を規則正しく踊る、という一般的にも想像に難くないスタイルの盆踊りのことを指す。つまり、1932年以前の沖縄における盆踊りが本土のそれではないことは明らかではあるが、通史的にいつの頃から「盆踊り」がエイサーの同義語ではなく、本土のそれとして定着していったのかを明らかにするため、新聞の発刊期まで遡りその変遷を追うこととした。以降、本土式の盆踊りを「盆踊り」とし、同義語としての盆踊りは盆踊りと表記する。

また、戦後復興のメルクマールとなった「琉米親善盆踊り大会」を念頭に置くと、「盆踊り」が沖縄に定着することなしに、コンクールが開催されることはないと推察した。つまり戦前から「盆踊り」は沖縄のなかで行われ、復興するまでには、沖縄の人たちのなかで一般的な芸能として定着していた可能性が高いと推論した。ただし、戦前の資料の多くは先の大戦で焼失しているので少なく、限りがあるが、新聞記事を読み進めることから始めてみると、盆踊りとさまざまな芸能との接点や広がりが見えてきた。

まず、盆踊りという名称がついた記事は、1911年11月6日に名護で行われた天長節での芸能に対する批評のなかに見える。管見するかぎり、これがもっとも早い記事ではないかと思われる。

◎県立農業学校を始め、各小学校其御前十時より厳肅なる式を挙行し(中略)
…見物人は忽ち人の山を築き見る人も見られるる人も興に入りたりしが、三十分間にて棒踊りは済み、次に同棒人数口盆踊りを演じ一層の興を添えたり。(後略)。

1911年11月6日「名護の天長節」『沖縄毎日新聞』

上記の記事中には、盆踊りに関する詳細な記述はないが、いわゆるエイサーの別称として用いたとみられる。あわせて、当該記事の数年前には、地方のエイサーが「乱れ」ている記事が散見されていたことをふまえると、天長節でエイサーを演舞したことは、大変興味深く、エイサーを盆踊りと記載したことも何か意図が感じられる¹。さらに1913年には、かつて王朝が置かれた首里の天長節の余興として、琉球音楽、沖縄芝居、獅子舞などの芸能とともにエイサーの名称がみえる²。

その一方で、盆の時期にさまざまな地域で演じられたとみられるエイサーは、様々な娯楽と結びつき、夏の定番題材へと定着していった。具体的には、翌1912年になって、盆が近づくと、人びとの娯楽の中心であった沖縄芝居の題材として扱われ、ムラで踊られていた《仲順流れ》が「ヨイサー踊り」として舞台の芸能となった。このエイサーの人気はさらに続き、1914年になると、舞台の芸能「ヨイサー踊り」だけではなく、エイサーの本来の目的である念仏

を題材にした、歌劇『可憐児』（内容と扱われた念仏は《継母念仏》）が中座で上演されている。これ以降、盆の芸能が題材に扱われるようになると、それまで盆休業をしていた芝居小屋でさえも盆興行と銘打って積極的に公演を行うようになっていった³。

愈々本日ヨリ開演

前幕 一、喜劇 種々

一、踊り 七月ゑひさあ

喜利 一、琉球史劇 黒金座主（電気鷹用）

（中略）

大喜利 一、歌劇 可憐児（但シ継母念佛、電気仕掛ケ）

凌■兼子タル暑サモ木消々過ぎ去り心地ヨキ時候（中略）尤モ踊リ継母念佛ハ種々仕組立テ、殊ニ墓場ノ處ハ電気大仕掛けケニテ目新ラシク御高覧ニ入レマスカラ今期モ相変ラス御最眞ニ賜リ度偏ニ御願申上候 謹白

九月二日 中座

1914年9月6日広告『琉球新報』

さらに、1916年には『盆祭り』と題した歌劇が大正劇場で公演された。物語については、別添を参照いただきたいが、要約すると「北山の若按司に、同じく若くして嫁入りした女性がいた。だが婚姻を結んですぐに夫が死別。実家へ戻りユタと呼ばれる民間の巫女にその理由を訪ねてみる。ユタは夫が若くして命を落とす事は決められていて、女性本人もまたこの運命をたどることが決まっていたと伝える。また、これを変えることはできないと諭される。しかしながら、女性は自分の運命に抗うかのようにして、家族の説得もむなしく命を立ててあの世へ行ってしまふ。女性は地獄絵図のような世界のなかで、再び自分の運命と向き合うこととなり、道に迷うと、どこからともなく特の高いお坊さんが出現し、女性を地獄の世界から導き出す」という、全七幕にわたる歌劇である。この物語の要所には、継親念仏の教えや目連尊者の物語が盛り込まれている。また、舞台上演については、出演者らの歎き悲しむ悲哀に満ちた演技や独唱が盛り込まれていて、人びとの心を惹き付けたようだ。さらに新聞記

事では、子どもたちの演技もまたかなり好評を呼び、上演が日延べしたという。

藝題

前踊 戻る道

連鎖 深山の美人

△右連鎖は當る廿日日曜迄

歌劇 盆祭り

△右歌劇は愈々本日より上演

大正劇場 潮會

(1916年8月19日広告『琉球新報』)

タイトルの『盆祭り』のなかの描写で盆にまつわる沖縄の姿がどのようなものであったかは定かではないが、慣習をふまえた物語であることを鑑みると、盆の時期に演じられるエイサー等を念頭においた可能性も高いだろう。

1920年代後半に入ると、琉球レコードやマルフレコードなどから、『七月エイサー』や『継母念仏』といった、エイサーの定番曲が吹き込まれていった。庶民の間でも日常的に耳にでき、親しまれる行事や芸能として親しまれたことがよくわかる。

このように、民俗芸能としてのエイサーは、芸能的な側面の流行や伝播だけではなく、本来の盂蘭盆会や念仏といった教義について他の芸能を介して、広く認識・共有して浸透していったのではないかと見られる。

その後、1920年代に柳田國男や折口信夫ら本土における積極的な盆踊り研究の潮流のなかでエイサーは便宜的に沖縄の盆踊りと説明されるようになり、山内盛彬はエイサーを「琉球の盆踊」（『民俗芸術』1928）として学界に紹介している。

2. 本土式「盆踊り」の登場

1910年代からエイサーの別称として盆踊りという呼称が使われてきていたことは明らかになってきたが、いわゆる「盆踊り」を演じた記事は、その後ほとんどみられなかった。先に結論のようになるが、1932年の『東京音頭』

の流行等の余波がほとんど沖縄ではみられないのである。では、戦後の盆踊りコンクールへとつながるような機会はなかったのだろうか。

それは、かなり時代が下って、1941年になって記事がようやく現れる。その記事の発刊元は、沖縄本島よりもさらに南の八重山諸島を中心に発刊されていた『海南時報』である。八重山では、盆に祖霊を吊う「アンガマ」と呼ばれる芸能が地域ごとにあって、エイサーともその様相は全く異なる芸態を持ち、当然ながら「盆踊り」とも全く異なっている。あの世から訪れるウシュマイとンミーがマーファーと呼ばれる子孫を引き連れ、家々を訪ねながら歌や踊り披露し、祖先の霊を慰める。八重山の島々のなかでも、芸能形態にはそれぞれ特徴があり、歌や踊りが異なっているが、「アンガマ」と総称的に呼んでいる。

さて、その記事によれば、石垣市登野城において「盆踊り」が開催されたとある。

再び巡りくる旧盂蘭盆…新体制の□りも高く「供物は質素に」、然し祖先崇拝の精神をしっかりとこめて各家庭□明五日晚（旧曆十四日）□は亡き故人の精霊を迎へ翌六日晚（旧十五日）送ることになってゐる。／然して字登野城男女青年分団では部落会及び壮年団の公演／下に六日（旧十五日）午後五時より記念運動場に於て健全娯楽を旨し盆踊りをする事になっている。盆踊りと言っても旧来のものとは打って変わり青年男女が総出動。先づ宮城遥拝、感謝黙とうに次いで男女青年団員一同が円陣を作り、獅子舞の後、折からの月明の下、斯道の大家、屋部憲賢、大浜津呂両氏の指導になる女子□□□集団美を遺憾なく發揮せる新考案の八重山舞踊で踊り抜くことになって居り、農村にウルホヒを与へんとする登野城青年団の新しい盆踊りの試みは早くも大人気を呼び大盛況が予想されてゐる。

1940年9月5日「新体制の旧盂蘭盆会／字登野城では新盆踊り」『海南時報』

ここで注目すべきは、「盆踊り」が芸能として流行して定着したのではなく、「農村部における健全娯楽への第一歩を踏み出す」ことを大義に掲げていることにある⁴。沖縄本島においても健全娯楽として推奨されていたのは、綱曳き、棒術といった健康的で優れた身体を作り出す芸能の類いで、戦争に向かうなか

にあっても規制がかけられたのは遅かった。かつてアンガマは、「ふしだら」な芸能であるとみなされ、警察の取締を受けている。1931年には「アンガマ踊取締協議会」が開かれ、出演者の氏名・年齢・住所などを警察署へ届け出ることにはじまり、他の字への道行きの禁止、粗暴野卑にならないよう注意が促されたことがある。では、なぜアンガマではなく「盆踊り」が催されることになったのだろうか。

当日の様子については、下記に記事を引用する（文字の網かけと下線は筆者による）。

戦時下農村に於ける健全娯楽を目ざして、石垣町字登野城青年分団ではトップを切って去る六日（旧十五日）午後□時半から記念運動場に於て盆踊りを開催した。この登野城青年分団、新しい試みは□然、大人気を呼び各字から観衆が殺到、…（中略）…文字通り、大盛況。午後五時半、男女青年団及び観衆一同総起立碑に宮城遥拝、感謝黙とう、後、登野城男女、□団員約四百名が出場、□□□（A）「みづほ踊り」を踊り、次いで青壮年の活発な棒踊り（□出□輔氏指導）シ子舞が□□に演出されて大好評を博し暮色迫るころ、かがり火が赤々燃え上る中に次々とモンペ□姿の女子青年□、（B）クイチヤ踊り、新ミナト節、メーヌハマ節が演出され周囲の観衆、人垣を健全、団体美に恍惚たらしめ大拍手を浴びた／最後に団員一同再び「みづほ踊り」を踊り抜き終って観衆と共にミロク節を合唱、多くの□激と将来の健全娯楽への一指針を与へて大成果を挙げ団長山田義晃氏発声で聖寿万歳を奉唱。意義深き新盆踊りの幕を閉じた。…（後略）。

「絶賛の嵐 登野城の盆踊りと敬老会の催し」

（1940年9月8日『海南時報』）

つまるところ、「盆踊り」を演舞したのは、時勢の影響が色濃いように思われる。開催された記念運動場⁵は、現在の登野城小学校西側、かつての琉米文化会館の前にあった場所で、現在では海星小学校となっている。

ここで、新しい試みとあるように、「盆踊り」が初めて催されたことを指している。その新しい「盆踊り」は、青年男女が踊るものとされていて、大きく

2つの「盆踊り」が披露されている。一つは、(A)《みづほ踊り》である。《みづほ踊り》が作られた背景には、時代が徐々に戦争へと向かうなかで、戦場へ送り出した男性労働力を補うために、作物の増産が叫ばれ、こと農林省（現在の農林水産省）がカボチャの増産や家庭菜園を推奨したことにある。この機運を盛り上げようと、増産PR曲として中山晋平が作曲したのが《みづほ踊り》である。この曲は、当時、ビクター内でライバルとして活躍した勝太郎と市丸の2人が唄ったこともあって話題の曲となったようだ。

もう一方は、(B)《クイチャ踊り》《新ミナト節》《メーヌハマ節》の3節である。これらは、1940年9月5日の記事にあるとおり、八重山出身の実演家の屋部憲賢、大浜津呂両氏の指導によるものだった。《クイチャ踊り》は、竹富島のアンガマで演じられる歌であり踊りである。竹富島にどのように「クイチャー」が定着したのかについては定かではないが、登野城の地域性を鑑みると竹富島の《クイチャ踊り》を演舞したと考えることが妥当だろう。《新ミナト節》は、大浜津呂の自慢の一曲だったようで、津呂をよく知る新城知子によれば、この機会に振り付けて広く知ってもらう機会にしたかったのではないかと推察していた。《クイチャ踊り》は、すでに円陣で踊る芸態となっているが、《新ミナト節》も《メーヌハマ節》も舞台用の踊りで「盆踊り」のように踊りにくい。ただ、両曲ともにテンポの良さから、似ていて編曲しやすい演目を彼らが選曲したのかもしれない。八重山を代表するこの2名の実演家による創作は、日本本土と同じものをそのまま受け入れるのではなく、地域に根付いた唄をもとにして、自らの文化の要素を含めながら、琉球舞踊や八重山舞踊の創作の延長として演じている。八重山らしさを失うことなく、「盆踊り」の様式を取り入れた社会的な背景については、引き続き調査が必要なところである。

おわりに

新聞紙上の記事の整理を中心に行い、いくつかの事例を紹介した。だが、事例としては極めて少ない。引き続き市町村字誌のレベルで地域芸能との接点と社会的な動向を整理していく必要がある。

かつて喜舎場永珣は、「盆踊りに就て」⁶と題してアンガマの芸能の保存について、次のような内容を新聞へ寄せている。「福島の盆踊りは盛んに行われて

いるが、『どこまでも正しい伝統を保存してそのよさを存続したい』という精神があって、それをみればアンガマも同様に、郷土芸術の保存という立場から寧ろアンガマを奨励せねばならない」と述べている。合わせて、アンガマの《無蔵念仏》の歌詞に触れ、親孝行について説いた立派な歌詞であり、理解してうえで演舞する事が郷土芸術を正しく継承していくことにつながると論ず。この記事は、アンガマが「ふしだらな」芸能として取締を厳しく受けた同年の協議会に先駆けて新聞へ寄稿されている。各地域に残されていた盆踊りの原点を再発見し、その視点を八重山の自らの芸能への評価に転換しなければ、もしかすると、アンガマは長い間にわたって禁止されることに繋がったかもしれない。八重山には喜舎場のように自らの地域文化の価値を見いだすとともに、登野城青年分団が演じた地域と他文化を融合させながら自らの文化へと吸収する力が、独特の芸能文化を育む下地にあるのかもしれない。このように独特な文化を持つ地域でありながらも、「盆踊り」は、まさに静かに確かに沖縄の芸能へと定着した芸能の一つとなっていった。その様相は戦後の展開を紐解くことによって、より明らかになっていくものと考えられる。

主要参考文献

- 大田静男 1993『八重山の芸能』ひるぎ社
沖縄市企画部平和文化振興課編 1998『エイサー360度 歴史と現在』那覇出版社
国立劇場おきなわ運営財団編
2011『琉球・沖縄芸能史年表 平成21年度報告第6集（戦後篇1）』国立劇場おきなわ運営財団
2012『琉球・沖縄芸能史年表 平成22年度報告第7集（戦後篇2上巻）』国立劇場おきなわ運営財団
2012『琉球・沖縄芸能史年表 平成22年度報告第7集（戦後篇2下巻）』国立劇場おきなわ運営財団
2013『琉球・沖縄芸能史年表 平成23年度報告第8集（戦後篇3上巻）』国立劇場おきなわ運営財団
2013『琉球・沖縄芸能史年表 平成23年度報告第8集（戦後篇3上巻）』国立劇場おきなわ運営財団
倉田喜弘 2006『日本レコード文化史』岩波書店
園部三郎 1980『日本民衆歌謡史考』朝日新聞社
日本放送協会編 1991『日本民謡大観 沖縄諸島編』日本放送出版協会
服部龍太郎 1971『夜話 日本のメロディー-流行歌 歌曲 民謡をたずねて-』現代教養文庫
藤澤衛彦 1951『流行歌百年史』第一出版社

- 森本敏克 1975『音盤歌謡史 歌と映画とレコードと』白川書院
- 山内盛彬 1928「琉球の盆踊」民俗芸術の会編『民俗芸術 第1巻第8号』地平社書房、pp. 49-58
- 琉球・沖縄芸能史年表作成研究会編 2010『琉球・沖縄芸能史年表：古琉球-近代篇』国立劇場おきなわ運営財団
- 近代沖縄新聞集成DVD版「沖縄毎日新聞DVD版 1909年-1914年」不二出版株式会社
- 近代沖縄新聞集成DVD版「琉球新報DVD版 1898年-1908年」不二出版株式会社
- 近代沖縄新聞集成DVD版「琉球新報DVD版 1909年-1918年」不二出版株式会社
- 近代沖縄新聞集成DVD版「琉球新報DVD版 1936年-1940年」不二出版株式会社

【歌劇 盆まつり】

首里の人

第一場

今日しも北山の城下には瑞雲が棚引いて何となく華やかな気分が漂ふている。それも理り今日は北山の若按司■花の新妻を迎へらるるいとも目出度き日なのである。

お城下ではこのよろこばしき儀のあるを伝へ聞いてい■や吾れも後の世の語りぐさにもなさんと人々は犇めき集ひて新嫁のお入嫁の行列を今やおそしと待っている。

やがて奴僕どもの賑やかな掛聲して綺羅を飾りし嫁入調度などを数多く■ひゆく。これも早やすぎさるに未だ新嫁の行列はうかがはれず待つ間程なくあちらより大提灯を持ちし女の童四人を先導し根引人の媼が続き其後より見るも麗はしき花嫁乗りし玉の輿は忠実そうな乳母の介添で徐々に進んで■■晴やかなソ■ヂンを羽織った御奥に使へる女子共も数多く■従■後■は八巻朝衣■纏ふた男子達が無数にさも己れ自身の悦びの如く何れも晴れやかな笑みをたった■■ゝ今日の赤■の慶を祝ぎつゝ動ゝとすゝむでゆく。此行列は誠に美しいものであった。

第二場

いよく掃除萬端行き届いた壮麗な北山城内大広間に於て今日の■■の儀式は挙げらるべく先づナカダチを始め御近習の諸役人は律々しき朝衣八巻の礼装で歡びに満てる我が北山の若按司、然も今をさかりの優男を設けの席へと座らせる。やがて又女の片もニービチンチュの媼の導きにて黒帳を被れる花嫁子は乳母の手を頼りにオドク波うつ小胸をおさへつゝ徐々と花婿と向あひの座に席とる、乳母は何事もなく此の喜びの儀式を濟させ給へと心に念じて姫君の右手に少し下つて座す女達は皆ズットすさつて控えている。やがてうらはずかしき花の面をかくす黒帳は取りのぞかれた。アラ！美しの花嫁ヨ！花も恥うばかりである、二世をちぎらん我が背の君の御前にいとはずかしい花嫁の頂はやさしく垂れた。全じく美しき婿君もうなだれている、ア、此の目出度くも麗しき場

面！やがて女■童の酌にて三々九度のかたきかための盃は女の唇■男の唇へとうつされた、実に目出度き極みである、ニービチンチュの媼は神かけて違はざる■（しるし）のウビーナデを新夫婦の額に三たびうるほし■、此の最中絶えず御前演奏は行はれ時津風枝もならさずいやが上にもいやまして城中挙げての歡喜をもたらしている。アツ、突然不幸は起った、何つ不足なく我が思ひの儘に榮耀を極めし一城の若按司、しかも美貌は誰■らぶものもなき此の殿■も病の爲めには、あらがふ術■なく其場にあはれ横腹抱いて打伏したサア今までの歡樂は消えていとも悲しき驚きに変った、傍の若医は脈を見た、お守役をはじめお近習の諸役人は此の医の顔色■返答を如何にくと、わなゝく胸を引きしめ■伺ふた。萬事休す矣！天命如何ともなし難しと医の口より悲■を帯びて洩らされたので一同は我を忘れて慟哭した。かくして■はれ身空若き二九近き若按司は再び蘇生すべもなく逝かれた。此間いとも、いたましきは遠く永久に樂しき人生を夢見て嫁に來りし花嫁の君ヨ！世の荒波にもまれず慈しき父の許よりいとほしき夫君の許へ送られて來た齡未だ二八もならぬいとしの乙女は只恐ろしき事の出来せし驚きと折角慕い参りし我が二世と契りし背の君の突然の死の悲みに、心迷ひて乳母の手をとり立つたり居たり……さりとて今來しばかりの我身なれば夫の傍に死水をとるも何となく御近習の男達手前はづかしくさりとて……とオドク……しかし遂に乳母に押しやられて倒るゝ如く、いとはしき若按司の遺骸に抱きつき高調な節にて悲しみを心の底より訴ふ、傍に付き添ひ参らす男子女子どもも皆ア、美人薄命ヨ！とともらひして共々泣きくづれぬ者は無った（此処の大見謝優花嫁の凡てに対しての物腰格合誠に大出来なり努力の結果と見る）かくして瑞雲に満し北山の城中も今は全く愁雲に閉されてしまった。

第三場

美人薄命とは誠なるかな、折角北山の城高き樓に楽しく若按司と只二人■々たる海上を眺めつゝ若き人生恋■誇りを語らばやと來しものを、無常の嵐はあたら盛の花をまたたく間に吹き散らしてしまった。

斯くて詮方なく今再び生きては帰らじものをと心に深く思ひて立出でし我が父上の一人まします村落れの我が淋しき家へ乳母に手をととはとられつゝ嫁

き■時の元気もなく屠所の羊の歩みの如く悲歎にくれて再び閻をまたいだ。

花嫁の実家には■今夜は賑はしく祝ぐならめと案に相違の此有様……一同は、あまりの事に涙は瀧津瀬の止めるべくもあらず、涙もろきは女の常今ははや、去りし若按司の事共よりも花の蕾の此の姫御前の浦まだ若き身空にて未亡人となりしを深くあはれに歎くも理りである。

あまりに奇しき今夜の不祥事何故ならん占なはせんと招きし巫女はやがて此打しめたる部屋に入て乳母の傍に座をしめた、姫は身も世もあらず悲歎の涙にくれはて、今は早や美しく髪結び上げし頭をさへ、上げ得ず打ち伏してあるばかり……。一方此方の巫女は四角な朱塗の盆に白米を受けとり居住ひを整へて天を仰ぎては奇声をうなりつゝ頻りと呪文を唱へ白米を摘みては盆上に列べる事、数刻……神の宣告はあった……何と？、一同はあまり驚きに■胸を撫で鎮め巫女の膝近くすり寄った。巫女は徐ろに口開き勿体ぶり「若按司の御壽命はこれまでなり、又姫御前の契らずして早未亡人となるも亦神の既に定めたまへる運命なり、されば如何にともなし難し」と皆まで告げざる内に乳母は此の悲運を清き心の姫御前に聞かす事のあまりに痛ましく思ふたのだから急に巫女の口に己が手を当て、無理やりに、此座より去ら■めた一同の女達ももらひの涙拭ひつゝ退座してしまった。

後に残れる乳母に姫御前は身のはかなき定めをかあちあれより姫御前（に扮する大見謝優）の一人舞台となりて独唱始まる（姫の独唱の中に父親出づ）……自分はどうしても花ならば今を盛りの御身におはす若按司のはかなく妾をすてゝ去り給ひし事の如何に天の定める使命なりとも御痛はしく……ア、あれを思へば■一夜の情けすら給らずと■神かけて誓ひし夫婦のかためありし妾なれば、いかで妾一人此の世の常なき現生に生きながらへられようか？ア、何故に悪魔の如き恐ろしい死の手は我がいとしの背の君を奪ひゆきしぞ恨めしや、いで此の上は君御一人■やるまい妾も共々冥府に御伴して三途の川とやらを徒ち渡り閻魔の應にゆきつき如何なる責苦に逢ふたとて少しもいとはずに只々君の御跡を追ひ参らしよう、若し又出来得る事ならば閻魔大王とやらに御願して君の御命を猶七拾年程延ば■給はる様、妾も共々其年まであの娑婆に命生れ得る様、御話し申ろう、何大王恐るゝ事はない、恋の力はつよい必ず勝つて見よう、されどもしならない時は一再び此の娑婆に蘇生り出来ない時は如何

しようぞ、年老ひ給へる慈しき父君や今日まで妾を我子の如く守り育てゝくれた乳母の此世の歎きはいかばかりか！ア、しかし是非とも妾の望みはかなへねばならぬ、心弱くてはならない…」などの述懐を長らく■々独唱し実に見■目も痛しい程の感じをふかく其繊弱なる態度で表はして見せた、(実に大見謝優の此の至難の一人舞台たる独唱をそれとなく幫助するは仲井真優の乳母と渡嘉敷優の父親とであってよく 後進の同優を引き立てかく演じさせているのは筆者の感心せし点なり一寸附記す) 此処で父親は痛ましき姫の此の述懐の決心をきゝ、其の若按司加那志に対する忠節貞操に感じ口に出しては姫の死は止めぬけれど流石は節の情としてムザムザ只一人暗ゝ冥府■迎らせる事の如何にもいたましきを思ひ、又乳母とてこの姫の生れ落つるや、幾春秋■ろくに■て漸く育てあげし我が思子の死を傍に聞いては、どうして黙して居られようぞ、乳母は一旦は止めた、しかし恋の強き力を持■■姫御前の如何で聞き容るべくにあらず……遂に最後の悲想な独唱を残して殊■にも此の貞女は一椀■毒薬を仰いだ。ア、此の容貌麗しき姫御前はかくして此世を去ってしまった(暗中同轉)

第四場

此処は娑婆とは全くかけ離れた冥府の地獄世界なのである。

見よ！あの娑婆では見る事の出来ない凄惨な光景で又実に恐ろしい動物ばかりがいるのではないか。左手を見よ！、そこには淡々と火焰が一面燃え広まって、いるのではないかそして人間界の人々より数百倍もあり相な奴しかも真赤な体をしていかめしい角の頭に生じた所謂赤鬼なるものが百貫目程のいぼつき鉄棒をふりかざして頻りに体格の小さい人を男女貴賤の別なく此の炎々たる火の車の中に無残につき落すやら、又は逃げる奴な手ひどく叩き入れて、またゝく中に骨灰にしている面憎さよ、此処は焦熱地獄だとの事だ。

其又上手を覗いて見ろ！オヤク此処は険阻な山又山だが、ひどい事には土の下から一パイにギラく鋭く光っている剣が生えているゾアレく、其の上を■の様な■鬼共が無理に人間を歩かせている、やア、足の裏を貫いて、真紅の血汐が混々流れているアレ又後からもく同じ運命にあの人たちはおかれてあるわい。

ア、其下にあの真赤な大池があるナ。ヤレくあんなに人が真赤に染って溺死

している一体何んであらう？、青鬼がドシク池につき落している成程血の池地獄だとの事だ恐ろしいもの計りだナ。

オヤ其傍に食物から火焰が出ているあれじや折角の御馳走も頂けない実に情けない所だナ、アレあの人は食べ様と手を出したら急に火になって、しまつひとうく泣き出してしまったワイ、此処が餓鬼道だナ、いやだナオヤク益々妙な大きな奴ら計がいるぞ顔面はスッカリ牛だが身体は鬼だ、然も手足あって立働いているが未だく馬面の奴もいる、こいつらは無暗矢■に人の首筋をひきお抜いている、しかもあんなにまで骨と皮ばかりになった可哀そうな人達を無残にナ。

あんな事を地獄世界へ新しく渡った娑婆の人たちは■ぶやいてやがて自分等にも其運命の廻って来る事を嘆いいる。

一方彼方の真暗な冥府道から杖を頼りに■なく白い小足を無理に這はせて彼の姫御前は来た、今は導き助けてくれる人もなく悲しく涙を拭ひつゝタド？と進んで来たすると一足さき位に辿りついたかの新参者の老若男女の群は此の新来の美女をとりまいた姫御前は、優しくも一同に向って■かれて一人一人にホンノしるしの手土産を手渡しして恭々しく新来の挨拶をされた、此の群れは手土産貰へば用はなしと忽ち散って只一人姫御前のみ其後に取り残された、あはれさよ、シクく泣いて道を問へど人答ふべきものもなし只々美はしき乙女の眼■には誠に恐ろしく目もあてられない人間虐殺修羅甚が血腥く見られるばかり……姫御前は如何はせんと迷はれた時、救ひの高僧はおごそかに、いづくともなく あらはれて白い手を取りいづれかに導き去った。

第五場

阿鼻叫喚の惨しき光景を見通して前面にはあれ実に娑婆で日ふ大審院の様な厳重しい閻魔の應が見える、其正面の一段高き所に机案をすえモシャク髭をふりかざした閻魔大王は左右に判事を従へ尚ほ責立て役たる牛頭馬頭の両巨体の百貫目以上もある鉄棒をゴツンくと地上に叩いて控えているので一層厳し感が生ずる、冥途の旅行者の群は一々大王の許で厳しい裁判を受け地獄極楽両道の判決を宣告される今しも一人の強欲らしき奴は浄玻璃の大鏡の前に向はせられた、アラ不思議や自然と己が娑婆で冒した罪悪は鏡面に透きて映りかなしや

地獄の責苦を宣げられる又年増の婦人は判決の結果うれしや蓮の■に打ち乗れば、其のまゝ迦陵頻伽の遊樂するてふ極樂の方へとは舞揚ってしまった、第三番目に高僧によって此處へ導かれて入って来たのは姫御前である高僧姫御前を閻魔大王の前に座せしめて退いた、おゝでいかめしき大王と優しい乙女との問答になり「妾の此處へ参りましたのは吾が背の君の二九定命を今より猶ほ七拾年の間延ばして即ち八十八の米のトーカーチの祝とやらまで壽を給へ」とつよき真心もて陳述哀願したので流石の大王も、かくうら若き姫の只一人己か身をも振り捨てゝ若按司の慕ふのあまり此處も恐れず来りし貞節に感じ入り遂ひに姫の願を許した、そして姫も共々かの娑婆へ再び送りかへす様命令を發したのである（暗中回轉）

第六場

姫の父親や乳母を始め家に使へし女の多くは皆泣きの涙で姫の遺骸を囲みて慟哭止まずにあつた。折しも姫の一度冷えし身体に温が現れた、アラ！段々姫の遺骸は動揺を始めた、■事なる哉、姫はムクくと蘇生った、一同の喜びは如何ばかりであらふぞ、父親は吾れを忘れて手の舞ひ足の揚がるを自■しない程に、飛び上って狂気の如く欣んだ、姫は「妾の願は成就致しました、若按司諸共八十八歳の齡を延ばして頂きか■蘇生いたしました」と其欣びは美しき顔のすべてに表れた、皆も喜びのべて再び姫にきらびやかなワタゼンを着せて若按司を迎え待った。

一度は冥土へ渡りし若按司も姫御前の忠節貞操の真心で蘇生した喜びの余り早速姫をむかえにやつて来た

父親は姫の忠節を鼻うごめかして恭やしく述べあげた

此處に目出度く花婿若按司は花嫁の柔かき手を取り帰城を促した。姫御前は恋の勝利をほこりがにいそくと、背の君の召さるゝまゝ手をとられてあつた。

第七場

北山の城内では一度閉された愁ひの雲も姫の力に今は全く晴れ亘り外には五色の瑞雲さへ輝いているされば北山の庶民の心は同じく失望より喜悅に戻った
今しも城内の大広間では一段高き上座に若按司夫婦は睦じく列座しているの

で丁度弥生の内裡雛を見る様に綺麗びやかである

其御前に於て一人の踊手（渡嘉敷優）は、その八十八歳の目出度き由来を口説節に合せて御披露し、それが済むで二才達が、若按司御夫婦の今日の喜びを祝ぐ、賑しい節の手面白き躍を演じ目出度く舞ひ納めた（完）

註

- 1 （前略）宿に帰って、お茶を啜り乍ら休んで居る所へヨイサーがやって来た。夜なれば兎に角、明ら昼間に…（中略）…一体田舎あたりのヨイサーと首里辺のヨイサーとはその趣を異にして居て、首里でのヨイサーは各戸を歩き廻って踊って見せてやって、その報酬として受くる金銭や酒や其他食物等は後で彼等が遊ぶ時の費用にするのである。所が田舎のヨイサーはそうではない。各家を歩いて得た報酬は其場に於て踊り乍ら平らげるのであって、金銭などやる事はない。又一晩総べてを廻る事が出来なければ二三日（昼夜共）も賭けてやるそうであるが終るとこれ迄の疲れの為、皆各々家に帰って寝入って仕舞ふのである。要するに両者の趣は全く違って居て何れを至当と云はふか、何れを高尚とほめようか。何分此等の事は土地の風俗状態にもよるのであるから構はんでおこう。…（後略）（1908年9月9日付「むいか日記（二）山川生」『琉球新報』）
- 2 首里区の天長節奉…（中略）…▲赤田は金鼓隊に綱引行列、エイサ屋形遊び▲崎山は旗頭を先頭に松明を持ちて綱引の行列▲金城は繁多川と共に提灯を先きにエイサ、稲すり節、雑踊をなし…（後略）。（1913年11月2日「○首里区の天長節奉祝」『琉球新報』）
- 3 例えば、1914年頃までは盆休にて休業する広告が出されている。「広告 本日より向ふ五日間盆祭に付休業致し尚ほ来る舊七月十六日より昼夜興行致し候間奮て御観覧あらんことを希ひあげ候 敬白／（中略）舊七月十日 球陽座 各位」（「広告」1914年9月3日）
- 4 「登野城青年分団が愈々盆踊りと敬老会を開催 健全娛樂へ」（1940年8月29日『海南時報』）
- 5 大正天皇成婚を祝い建設されたか昭和天皇の即位を祝して建設された。
- 6 1931年8月18日 喜舎場永珣「盆踊りに就て一郷土芸術の保存一」『光島朝日新聞』